

丹沢山地における鳥類の希少な繁殖例について

山 口 喜 盛

Yoshimori YAMAGUCHI: Rare Breeding Records of
Some Birds in Tanzawa Mountains,
Kanagawa Prefecture

はじめに

筆者は丹沢山地の鳥類について調査を続けているが(山口, 1991), 1993年5月から8月にかけて、丹沢山地でアオバト *Sphenurus sieboldi*, ジュウイチ *Cuculus fugax*, ヨタカ *Caprimulgus indicus* の繁殖を確認した。

これらの種は、神奈川県内において、主として丹沢や箱根の山地に普通に生息しているが(日本野鳥の会 神奈川支部, 1992), これまでに確かな繁殖記録はないので、筆者の観察を報告しておく。なお、アオバトについては全国的にも繁殖確認例が少ない。また、ジュウイチについては、雛の興味深い行動を観察したので併せて報告する。

なお、中村道也、荒木尚登、牧野佐絵子の各氏には貴重な情報を提供していただいた。本報をまとめるにあたっては、平塚市博物館の浜口哲一氏にご指導いただいた。これらの方々に厚くお礼申し上げる。

アオバトの繁殖

丹沢山地のアオバトは、繁殖期は中腹の二次林から稜線のブナ林に生息する。冬期は稀に山麓で観察されることもあるが、ほとんどの個体は他の地方に移動するものと思われる。

1993年5月29日、丹沢山東側の清川村堂平のブナ林で、筆者と荒木尚登氏は鳥類調査中、チドリノキの樹冠部にとまっているアオバトの番を発見した。そのまま進んだところ、1羽は飛び立ち、チドリノキの真下に着いた時に、残った1羽も飛び立った。その場所をよく見てみると、枯れ枝が積み重なっている巣らしいものを発見した。6月9日には、巣に親鳥がいて抱卵中のようだが、巣内の確認はできなかった(図1)。6月13日にも、親鳥は巣にいたが巣内の確認はできなかった。6月26日には、巣に親鳥はおらず、巣の中には何もな

かった。繁殖に失敗したものと思われる。

営巣地のブナ林は東斜面に位置し、ブナやイタヤカエデ、シナノキなどの高木層がよく発達している。亜高木層・低木層にはリョウブ、アブラチャンなどが見られるが貧弱で、林床のスズタケは退行し、丈の低い草本が見られるだけで林内の見通しはよくなっている。巣の場所は、このようなブナ林の下部で、スギ・ヒノキ人工壮令林との境近くの標高約1100m付近で、営巣木周囲の高木の樹冠はギャップがあるために若い広葉樹やつる類が繁茂していた。営巣木のチドリノキ(図2)は谷側に傾斜し、巣はサルナシのつるが密に絡んでいる樹冠部に作られていた。巣の高さは地上7.20mの位置にあり、粗雑に枯れ枝を組み合わせた皿型で外径は約25cmだった。

ジュウイチの繁殖と雛の行動の小観察

ジュウイチは夏鳥として渡来し、丹沢山地では中腹から稜線の森林に広範囲に生息しているが個体数は少ない。

1993年7月27日、清川村札掛のタライ小屋沢で、中村道也氏にオオルリの巣に案内してもらったところ、巣の中に巣立ち間近なジュウイチの雛1羽がいた。巣は林道脇の崖のへこみにあり、地上2.0mの高さであった。仮親であるオオルリの雛が頻繁に給餌しており、雄の姿はなかった。オオルリはこのような林道脇の崖によく営巣し、これまでに何度かオオルリの営巣を確認してきたが、ジュウイチの托卵を確認したのは今回は初めてであった。7月29日には巣にジュウイチの雛の姿はなく巣立ったようであった。

7月28日に雛の興味深い行動を観察したので、それについても報告する。午前10時頃から12時頃まで離れた位置から遠隔操作により給餌の撮影を行った。親に対して餌をねだる時に、口を大きく開け口内の鮮やか

な黄色や赤色の色彩を見せて給餌本能を刺激することは一般の鳥類に見られ、他の鳥に托卵するカッコウ類などに特に発達した習性であることは既に知られている。ところが、今回の観察では仮親が餌を運んできた時、ジュウイチの雛は口内が黄色い大きな口を開けるだけでなく、片方の翼を半開きにし、裏側にある黄色く口が開いている形によく似た部分を見せつけていた。それは翼の下に、もう一つの口があるように見えていた(図3)。翼を上げるのは片方ずつで左右同時に見せることはなかった。また、撮影の位置からは右側は見にくく、右側にも同じ模様があるのかは分からなかったが、一部黄色い部分は見えていた(図4)。

こうした模様と行動は、自分の口以外に、もう一つの口を見せることによって、仮親の給餌意欲をよりいっそう高める効果をねらっているように考えられる。ジュウイチについてこのような観察例は今までになかったのではないかと思う。今後、詳細な観察を行いたい。

ヨタカの繁殖

ヨタカは夏鳥として渡来し、丹沢山地ではスギやヒノキの若い人工林や伐採跡の低木林などの開けた環境に生息するが、個体数は少ない。



図1. 抱卵するアオバト

1993年8月5日、秦野市寺山の標高700m付近の(図5)、疎らなスギの高木の中に再びスギの稚樹を植栽した造林地の斜面で、4mほど先の地上からヨタカの雌が飛び立ち、10mくらい離れた杭にとまり擬傷行動を行った。抱卵中だったようで、地面に直接卵が2個あった。そこは以前シカによって作られたヌタ場のようで、周囲と比べて段差があり平になっていて、草があまり生えておらず、土が露出していた。

一方、これより前の6月12日に、牧野佐絵子氏は清川村札掛の押出し沢、標高700m付近で、樹高1.5~2mほどのヒノキ人工林内の作業用径路脇の地上にあったヨタカの卵2個を確認している(図6)。

この両方の繁殖地は、以前からヨタカの生息が確認されてきたところで、いずれも共通して広域な若い人工林地帯で、気象条件が悪かったり、シカの食害等で成林の遅れている地域であった。

文 献

山口喜盛, 1991. 丹沢山地鳥類目録. 自然と文化,

(14): 83-110. 平塚市博物館.

日本野鳥の会神奈川支部, 1992. 神奈川の鳥1986-91. 440 pp.

(丹沢自然保護協会)



図2. アオバトの営巣環境 (○印が巣の位置)



図3. 翼の下側の黄色い口に似た部分を見せる
ジュウイチの雛（左側は本当の口）



図4. 右側の翼に一部見えている黄色い模様



図5. ヨタカの繁殖環境（○印が巣の位置）



図6. ヨタカの卵
（牧野佐絵子氏撮影）